

カリシウイルス感染症

Feline Calicivirus Infection

猫には俗に言う「猫風邪」とよばれる病気が存在します。これはいくつかのウイルスや細菌などが単独あるいは複数感染することにより起こります。正式には猫の呼吸器病症状候群とか上部気道感染症状候群などと呼ばれ、人間で言えばいわゆる「感冒：風邪」と同じと考えていただければと思います。猫カリシウイルス感染症は、この症状群の中のひとつで猫ウイルス性鼻気管炎と併発することが多いようです。

原因

原因は猫カリシウイルスの感染で、このウイルスには多くの型があります。感染は病猫との直接的な接触や飼育者の手や食器などを通じた間接的な接触と考えられます。このウイルスは猫科の動物のみに感染します。

症状

潜伏期は2～10日程度です。感染すると始め鼻水や目やにがでて、症状が進行すると鼻水や目やにはますます増え、口内炎、舌のピランや潰瘍、涎を流す、口の痛み、結膜炎や結膜浮腫が見られることもあります。単独で感染することは稀で、猫ウイルス性鼻気管炎と混合感染すると症状は悪化します。ウイルスの型によっては呼吸器症状を示さず、筋肉痛や関節痛、足の指の間に潰瘍ができるものなどもあります。

猫白血病ウイルスや猫免疫不全ウイルスに感染していると症状はさらに重篤になることがあります。



診断法

動物病院では、一般的に、ワクチン接種の有無などの問診、視診を行い仮診断して治療を始めます。一般状態を知るために各種検査が必要になることもあります。確定診断を行うには、検査機関に依頼して抗体検査や特殊な方法によりウイルスを確認します。

治療法

現在カリシウイルス感染症の治療薬として猫用インターフェロンが用いられています。それと併用して、一

般には細菌の二次感染を防止するために抗生物質の投与、解熱剤、抗炎症剤、せき止、症状にあわせて点滴や栄養剤の投与、点眼剤や点鼻剤の投与などの対症療法を行います。

早期に治療を開始すれば死亡率が高くなることはさほどありませんが、ワクチン未接種の幼猫や老猫は肺炎を併発して重篤な症状になることもあります。

自宅での看護法

治療は獣医師に任せるしかありません。自宅では、発病した猫は特に大量の猫カリシウイルスを排出しますので、他の猫への感染に十分注意してください。排泄物や食器、敷物などは焼却処分、あるいは消毒剤（次亜塩素酸ソーダ、逆性石鹼、アルコールなど）でよく消毒します。

退院（この病気の場合、病院によっては入院治療を行わないところもあります）あるいは通院できるようになったら、消化がよく栄養価の高い食餌を与え、獣医師から指示された投薬はきちんと行いましょう。また、暖かく十分な湿度を保った環境を整え、汚物などはこまめに処理して清潔な環境を保つことが重要です。動物病院には液体やペースト状の栄養剤などもありますので、食欲がない時には主治医の先生に相談してこれらを処方してもらおうといでしょう。

予防法

ワクチン接種で予防するしかありません。猫カリシウイルスが猫の体内に侵入しても、ワクチンにより免疫ができていれば発病することはありません。あるいは、仮に発病しても軽症ですみます。猫ウイルス性鼻気管炎、猫汎白血球減少症との3種混合ワクチンを必ず接種しましょう。

メモ

この病気は伝染性が強いのでワクチンを接種していないとペットホテルや動物病院で預かりや入院ができないところがほとんどです。仔猫が生まれたら、必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムと追加接種を行いましょう。

病猫は回復しても数年間ウイルスを排出し続け、感染源になる可能性がありますので、他の猫との接触や新たな猫の導入には特に注意が必要です。